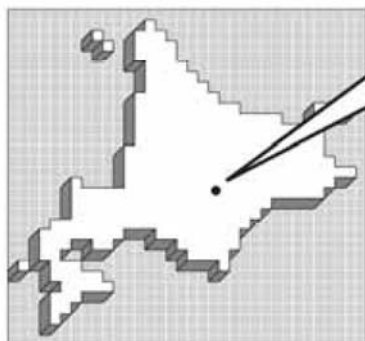


連載 わがマチの自慢 No.15



清水町

「豪雨災害から一年、
復興をめざして進む
畑作と酪農のまち」



長大な日高山脈
に抱かれるように
広がる畑や牧草地。
清涼な空気と清ら

かな川の流れ。清水町は畑作
や酪農を主体とし、製糖工場
など多くの食品加工工場が立
地する農業を基幹とした町で

ある。

JR根室本線が町内を南北
に通過し、JR石勝線によっ
て千歳、札幌と繋がっている
ほか、ほぼJR線に並行して
国道三八号線、東西には国道
二七四号線が横断している。

また、北海道横断自動車道の
十勝清水ICもあり、十勝管
内西部に位置するこの町は十
勝圏の玄関口である。

また、独自の文化を持つ町
でもある。ベートーヴェンの
交響曲第九番（第九）を全国
の市町村で初めて住民による
合唱団によって合唱したこと
から「第九のまち」としても
知られ、第九に関わる記念行
事のほかに幼稚園や学校では
毎年合唱が行われている。ア
イスホッケーの歴史も古く八
〇年以上の歴史がある。町村

では全国初の屋内リンク場が御影地区に整備されており、オリンピック代表をめざす有望選手が育っている。

豪雨災害からの 復旧・復興をめざして

昨年夏（六～八月）の北海道の降水量は平年比で一八七%と札幌管区気象台が昭和二十一年から統計を開始して以降最も多い量を記録した。特に、八月中旬からはわずか一週間ほどの間に、台風七号、一一号、九号の三つの台風が相次いで上陸、ほぼ一週間後の八月末には台風一〇号の接近により、昭和五六年以来となる記録的な大雨となり、河川の氾濫や土砂災害、住居等建物への浸水害などが発生した。

清水町では、特に台風一〇号の接近に伴う豪雨により大きな災害が発生した。アイヌ語で「明るく清らかな川」を意味し、清水町の名前の由来となった「ベケレベツ川」をはじめ「芽室川」や「小林川」など十勝川水系の普段は穏やかな流れの河川が大きな脅威となった。河川の氾濫による道路の寸断や橋の崩落、市街地の浸水、断水、農業関係でも、畜舎などの農業用建物や農業機械の浸水や流出、農地の冠水や土砂の堆積、農地の流亡、用排水路の損壊など、過去に例を見ない甚大なものとなり、住民生活や地域産業に大きな影響を及ぼした。町では、被災直後から国や北海道をはじめ関係機関と連携しながら、早期復旧に向けて

全力で取り組んできている。被災後一年が経過した八月下旬に清水町を訪れた。崩落した橋や河川の周辺には生々しい傷跡が残っているが、被災箇所には重機やダンプが作業をしており、道路や橋りょう等の年度内復旧をめざして工事が進んでいる。

農地については、国の補助を受けて行う大規模な災害復旧事業の対象となっているほ場が約一一六haあり、九月の秋まき小麦の播種までには九割近く復旧する見込みである。残りについても、来春の雪解け後に工事を進め完了する計画である。作土が流失した圃場を平らに埋め戻すための大量の土については、北海道開発局の協力を得て、十勝川の掘削土を運搬して使うことで

工事を大幅に削減することができた。さらに町でも、農家の自己負担がないように助成を行うなど、農家の営農継続に向けた意欲が維持されるよう努めてきた。

復旧工事によって農地の形状は回復しても、心配されるのは被災前と同じように作物が生育できる土壌条件の回復にどのくらいかかるのかということである。掘削土もいろいろな土壌条件の土がある。町では農家や農協、普及センターなど関係機関とも連携しながら、今後数年は作物の生育状況調査や土壌診断などを行い、必要な対応を検討していきたいとしている。

排水路についても復旧工事が進んでおり、渇水期に当たる一一月に向けて工事が大幅

に進んでいく予定であるが、すべての工事が完了するのは平成三〇年秋の計画となっている。

役場や農協などの関係機関や農家の復興に向けた取り組みはこれからも続いていく。



多様な農業経営体

清水町の農業は多様な経営体が支えている。

酪農経営では、多頭数飼養の企業的経営やブリーダー経営のほか、放牧酪農など個性

的な飼養方式に取り組んでいる経営もある。平成二八年の生乳生産量は一二万トンを超え十勝管内でトップである。

一方畑作は小麦、豆類、てんさい、ばれいしょを主体に作付けされている。離農や担い手の高齢化から農地の賃貸借などによる経営規模の拡大に伴い、作業機の大型化が進み、小麦など省力的な作物の作付が増加している。製糖工場が立地しているがてんさいの作付けが減少気味であり、輪作体系維持の点でも課題となっている。個別・家族経営が主体で多くの経営が規模拡大志向を有しているが、その一方でにんにくやアスパラガスなど野菜作部門を導入する経営もある。さらに、自家農畜産物の加工や直売、農作業や加

工の体験など経営の多角化に取り組む経営体も見られる。

こうした経営体を支える営農支援システムとしての「清水町農業サポートセンター」は、道内でも有数の作業受託面積を誇る大型のコントラクター組織である。牧草・とうもろこしの播種・収穫作業を中心に、堆肥やスラリーの散布、耕起・整地、てんさいの移植や豆類の収穫等の作業を受託しており、清水町農業の中核的な役割を果たしている。

畑作では、このほかにてんさいの共同育苗センターや畑作の作業受託を担う複数戸法人も存在している。今後も農業労働力の不足問題が一層顕在化してくることが確実であり、サポートセンターを核にした農作業支援システムの充実が



今後の課題と言える。

ご当地グルメで 交流人口の拡大を

清水町内には有力な観光資源が少なく、観光客を呼び寄せるような宿泊施設もないことから訪れる観光客は少ない。北海道横断自動車道の全面開通を契機に、魅力ある「食」



で多くの人に清水町に訪れてもらおうと、官民一体となつてご当地グルメの開発に乗り出した。道内有数の生産量がある牛肉と鶏卵を食材に使うことを決め、町内飲食店の料理人など有志が協力し合つて試食会を何度も行つて試作を重ね、半年を費やして平成二二年七月に「十勝清水牛玉又

ステーキ丼」（愛称は「牛玉丼」）は完成した。

牛肉は、農協が力を入れてブランド化を進めている「十勝若牛」のステーキ肉をサイコロ状にカットして使用。ステーキ肉は指定のレシピに基づいた「味噌味」とした。この「十勝若牛」は、町内で肥育されたホルスタイン種で、通常の二〇カ月に比べ半年ほど短いおおむね一四カ月齢で出荷されている。赤身肉本来のうまみとヘルシーさを前面にアピールした牛肉であり、平成二四年には「地域団体商標」を取得している。今年春には、道央圏の洋菓子・パン製造販売の「もりもと」がパンの中で一番売れているカレーパンの肉を豚肉から十勝若牛にリニューアルして「十

勝若牛」の贅沢カレーパン」として販売を始めた。台風被害を受けた清水町農業復興支援の意味もあるという。

また、鶏卵も地元産を使い、牛肉と同じく味噌味のふわふわスクランブルとして提供。卵と組み合わせる野菜は提供店の自由とするが、なるべく地元産や旬にこだわっている。ご飯は北海道米を使用し、指定の白い卵形のどんぶりに盛る。これに汁ものや香のものをつけて提供している。

この牛玉丼は、新・ご当地グルメグランプリ北海道で平成二五年から三年連続グランプリを獲得し、殿堂入りを果たしている。今年の新・ご当地グルメグランプリは、清水町と同様に昨年八月の台風により大きな被害を受けた南富



清水公園

良野町で開催され、牛玉丼も出展した。すでに殿堂入りを果たしている牛玉丼の出展は、南富良野町にも勇気を与えたに違いない。大雨災害や鳥イ

ンフルエンザの発生などを乗り越え、清水町といえば牛玉丼という評価が根付くことをめざしてこれからも関係者の努力は続く。

このほか、近年、全国どんぶり選手権で上位入賞を続け

ている「牛とろ丼」も全国的に注目されてきている。町内の有限会社十勝スロウフードの牛とろフレークを温かいご飯に載せ、ネギや海苔などの薬味を載せて醤油ベースのタシをかけたものだ。今年五月

半ばから六月はじめにかけて東京都立川市で開催された「満腹博覧会二〇一七」で人気グルメグランプリ総合一位を獲得している。十勝管内といえば豚丼の印象が強いが、こうした牛肉を使った丼ぶりをご当地で食べてみるのもおもしろい。ほかに町内には上川中央部から十勝へとつながる北海道

ガーデン街道の八つのガーデンのうちの一つである「十勝千年の森」があり、安定的な集客力がある。また、ダンケファーム串田牧場、美蔓めん羊牧場やあすなるファーム、ムーミン牧場、ランラフ・ファーム（十勝千年の森）といったふれあいファームなどもある。過疎化が進む全道の地域の中で、これだけ交通インフラに恵まれた町は数少ない。国道二七四号線も一〇月末までに通行止めが解除される予定だ。清水町の持つ豊かな地域資源を町民の知恵で活かしていきたい。

都会の子供たちに
食の大切さを伝えたい

清水町内では農家が連携し

て農泊に取り組んでいる事例がある。修学旅行で十勝を訪れた都会の高校生を農家が受け入れ、農作業体験や民泊体験を提供する農村ホームステイに平成二四年から取り組みだした。NPO法人食の絆を育む会が十勝全体の取りまとめ役を担っており、会を構成する十勝管内の一四の団体に所属する農家などと連携してホームステイを進めている。清水町では、受入農家などで構成する清水町農村ホームステイ協議会が構成団体となっている。

受入農家は、都会の高校生に。ありのままの農業体験や生活体験をもらうことや、家族のようにふれあうことを心がけている。この体験が農村の生産現場を知らない

高校生たちの「農業」や「食」への理解を深めるきっかけとなり、こうした取り組みを通じて少しでも清水町と都市との交流の絆が生まれることを願って活動している。今年度も六月から受け入れをスタートしており、年間で五校一八〇名を受け入れる予定である。

都会からきた高校生に多くの驚き・感動を与え、そうした高校生の姿から、受入農家も地元や農業の素晴らしさといった何かを感じているようだ。町の広報紙に掲載された生徒の感想と受入農家の声を紹介する。

生徒の感想：「朝が涼しく過ごしやすかった北海道。畑や牧場、そして道路の広さにはびっくり！違う国に来たみたい

です。牛と身近に接して、哺乳や乳搾り、寝ている牛を身振り手振りで起こすなど、貴重な体験ができました。とてもあたたかく迎え入れていただいた○○さんのお家族、そして牛たちとの触れ合いは私たちにとって大切な財産です。また清水町に来たいです。楽しい体験をありがとうございました。○○家特製手作り



豆腐の作り方を教えてもらったので帰ってからぜひ作ってみたいな」。

受入れ農家の声：「地元に戻ってからスーパーなどで野菜や乳製品を見た時や、テレビで北海道を放映したときに「清水町」を思い出してもらえたらうれしいですね。

農業や酪農業の食へ物を生産する大変さと大切さ、これらを広大な大地の中で直接感じてもらいたいと思っています。また、家族と過ごす時間がたくさんあるという農家の良さも一緒に感じて欲しいですね。我が家には小さい子どもがいるので、受入れが大変そうだなと言われますが、実は、この子どもが、私たちと高校生を繋ぐ良いきっかけになっています。子ども達にとつて



も、家に居ながら良い社会勉強になっていとも思うので、若い世代の皆さんにもぜひ参加して欲しいと思っています。これからも受入れ側が負担にならないような、型にはめず、自分たちも楽しみながら迎え入れていきたいですね。」

「食の絆を育む会」では、受入農家の負担を少しでも減

らそうと受入れの心構えや食事や体験のメニュー例などを紹介した「受け入れお助けBOOK」を配布している。また、貴重な体験を一過性の思い出づくりに留まらない学びへとつなげようと事後学習の取組みを学校と連携しながら進めている。

〈取材後記〉

被災地からは、「まさか私たちのまちに水害が起きると思わなかった」とか「まさかあの川が氾濫するとは思わなかった」といった声が聞かれます。被災地ばかりではなく、筆者を含めて多くの北海道民は梅雨がなく台風が少ない本道では大きな水害はないと思っただけではないでしょう。

清水町でも被災前は同様の意識でした。でも、実際に災害は起きてしまいました。札幌管区気象台によると北海道内で一時間当たり降水量が三〇ミリ以上の「短時間豪雨発生日数」は増加傾向にありま

す。近年の気象変動の中で、こうした自然災害はどこでも起こりえるのです。

清水町ではこの大きな災害の経験を教訓にして、自然災害は決して例外ではないことを肝に銘じ、今後の災害対応の強化や避難体制の整備など、住民と行政が一体となって能力を高めていこうとしています。九月一日に放映されたNHKの北海道クローズアップ「異常気象にどう備えるか」連続台風から一年〜では「いかに（気象や河川の水位

等の状況を）予測するか、いかに避難するかが課題である」と述べられていました。

清水町の早期復興を願いつつ、こうした被災地の経験や教訓からしっかりと学ぶことが重要だと感じた取材となった。

◇ ◇ ◇

清水役場には、お忙しいところ取材の対応や資料・写真の提供、原稿の確認など多くのご協力をいただきました。お礼申し上げます。

一般社団法人北海道地域農業研究所
特別研究員 三津橋 真 一